

「しか」の語順現象をめぐって

茂木俊伸

(キーワード: とりたて詞, 「しか」, 語順, 否定, スコープ)

0. はじめに

とりたて詞「しか」は、これまで、否定対極表現 (Negative Polarity Item, NPI) の分析の中で、文中における生起条件を中心とした、さまざまな統語論上の問題が論じられてきた (cf. 松井 (山森) (1996))。

例えば、「しか」は同一の節内に複数生起せず、否定辞との間に一对一の関係を成立させなければならないことが知られる。

(1) *太郎しか 小説しか 読まない。

このように目に見える形で否定辞との関係を示す「しか」は、特に生成文法を中心とした理論的研究において盛んに分析が行われている。一方で、現代日本語の記述的研究においては、その意味的側面に分析の重点が置かれており、「しか」の構文的な振る舞いを、特に他のとりたて詞との関係から分析した研究は少ないと言える。

本稿では、先行研究で指摘されてきた「しか」に関する現象の中で、特に「しか」と他のとりたて詞が共起した場合に見られる二つの句の間の語順制限に注目し (第1節)、とりたて詞の「呼応」に基づく分析という観点から、この問題を論じる (第2節)。そして、この語順の問題が「しか」句に前後するとりたて詞のスコープ (作用域) 解釈に影響を及ぼすことを示した上で、「しか」句ととりたて詞句の語順に関する一般化を提示する (第3節～第4節)。最後に、この一般化の拡張の可能性とその含意について述べる (第5節)。

1. 「しか」句ととりたて詞句の語順制限

一文中に複数のとりたて詞が現れる「多重とりたて詞」現象はさまざまな形で観察されるが、実際には、すべてのとりたて詞が自由な組み合わせの下に現れるわけではない。特に「しか」の場合、この組み合わせの制限が顕著であり、とりたて詞の統語的特徴を考える上で一つの手がかりとなりうる。

以下、「しか」と共起する「さえ」と「こそ」に見ら

れる語順制限について、具体的に見ていく。

1. 1 「意外」の「さえ」

まず、次の(2)のような「意外」の「さえ」について見る (とりたて詞の意味・用法については、沼田 (1986, 2000) 等を参照)。

(2) 太郎はリンゴさえ食べなかった。

Nishioka (2000) が指摘するように、この「さえ」が「しか」と同じ文中に現れた場合、「しか」句と「さえ」句との間には、相対的な語順の制限が存在する。

例えば、「しか」が主語名詞句に、「さえ」が目的語名詞句にそれぞれ後接する場合、(3a) のような「しか」句—「さえ」句 (主語—目的語) の語順が許容されないのに対し、(3b) のような「さえ」句—「しか」句 (目的語—主語) の語順にすれば問題がなくなる。

(3) a. ?*ジョンしか リンゴさえ 食べなかった。
b. リンゴさえ ジョンしか 食べなかった。
(Nishioka 2000 : 176, (44))

一方、(3)とは逆の分布、すなわち「さえ」が主語名詞句、「しか」が目的語名詞句に後接する場合、(4a) のような「さえ」句—「しか」句 (主語—目的語) の語順には問題がないのに対し、(4b) のような「しか」句—「さえ」句 (目的語—主語) の語順は許容されない。

(4) a. ジョンさえ リンゴしか 食べなかった。
b. ?*リンゴしか ジョンさえ 食べなかった。
(同, (45))

このように、「しか」句と「さえ」句が単文内で共起する場合、表層的な語順において、前者が必ず後者に後続して現れなければならない、という制限があることが分かる。

1. 2 「特立」の「こそ」

次に、主観的意味を伴う述部と共起する(5)のような「特立」の「こそ」のケースを考える。

(5) 中村さんこそ次の部長にふさわしい。

Tanaka (1999: 70) が論じているように、この「特立」の「こそ」と「しか」の間にも、前者が後者に先行しなければならないという語順制限がある。

- (6) a. ジョンこそ LGB しか 読まない。
 b. ?*LGB しか ジョンこそ 読まない。
 (同, (8))を一部改変)

ただし、(6)は落ち着きが悪い文であると思われるため、「こそ」が生起する環境を整えた、次のような例を見てみる。

- (7) a. 好きな音楽こそ ライブでしか 聴きたくない (こと)
 b. *ライブでしか 好きな音楽こそ 聴きたくない (こと)
- (8) a. こういう集まりにこそ 気心の知れた友人にしか 来てほしくない (こと)
 b. *気心の知れた友人にしか こういう集まりにこそ 来てほしくない (こと)

ここから、「しか」と「特立」の「こそ」が共起する場合、「こそ」句は「しか」句に後続する位置には現れないということが分かる。

1. 3 従属節専用とりたて詞

とりたて詞「さえ」「こそ」は、特定の従属節内において、単文の場合と異なる特有の解釈を生じることが知られる。すなわち、条件節では「さえ」が(9a)のような「最低条件」解釈を、逆接節では「こそ」が(9b)のような「譲歩」解釈を持つ。

- (9) a. 君さえいてくれれば、それでいい。
 b. 彼は見た目こそ平凡だが、豊かな才能を持っている。

これらの「さえ」「こそ」に関しても、「しか」との間に語順制限が存在する。まず、条件節において「最低条件」の「さえ」が「しか」と共起した場合、「さえ」句が「しか」句に先行する語順のみが許容される。

- (10) a. 個人情報のうち、このデータさえ 社内にしか 漏れていなければ、まだ対策は可能だ。
 b. *個人情報のうち、社内にしか このデータさえ 漏れていなければ、まだ対策は可能だ。

また、「譲歩」の「こそ」にも同様の現象が観察され、逆接節内では、「こそ」句が「しか」句に先行して現れなければならない。

- (11) a. 個人情報のうち、このデータこそ 社内にしか 漏れていなかったが、他は分からない。
 b. *個人情報のうち、社内にしか このデータこそ 漏れていなかったが、他は分からない。

このように、従属節においても、単文と同様、「しか」と「さえ」「こそ」との間に語順の制限が起こることが分かる。

1. 4 一般化

以上、「意外」及び「最低条件」の「さえ」、「特立」及び「譲歩」の「こそ」には、「しか」句との相対的な語順に関して、明らかな制限が存在することが分かった。これらの現象は、まったく無関係のものではなく、それぞれのとりたて詞の「呼応」のパターンに基づいて、共通のメカニズムの下に捉えることができる。

「しか」と否定辞との関係が典型であるが、とりたて詞には、一般的に、個々の語ごとに決まった述部要素と一定の構造的関係を持つ(係る)という特徴が備わっていると考えられる。これが、ここで「呼応」と呼ぶものである(より詳しい議論は、茂木(2004)を参照)。

議論を単純化するために、「意外」の「さえ」と「特立」の「こそ」が時制辞(T)と、「最低条件」の「さえ」と「譲歩」の「こそ」が接続助詞(C)と呼応すると仮定する。また、一般的に想定されているように、「しか」は否定辞(Neg)と呼応すると考える。

これらの呼応パターンを、ここまで見た語順制限と合わせて図示すると次のようになる(□で囲んだ要素同士、及び「しか」と否定辞が呼応する)。

- (12) a. サエ/コソ シカ ... Neg T
 b. *シカ サエ/コソ ... Neg T
- (13) a. サエ/コソ シカ ... Neg C
 b. *シカ サエ/コソ ... Neg C

(12)から、否定辞(Neg)と呼応する「しか」を含む句と、否定辞よりも構造的に上位にある時制辞(T)と呼応する「さえ」「こそ」を含む句との間の語順は、呼応

相手となる述部要素の承接順（例：「行か—なかつ—た」（動詞（V）—否定辞（Neg）—時制辞（T））と対称的になっていなければならないことが分かる。このことは、(13)のような、否定辞よりも上位に想定される接続助詞（C）と呼応するとりたて詞を含む句と「しか」句とが共起するケースでも同様である。

これらの事実を一般化すると、「述部の構成上、否定辞よりも後に現れる（構造上より高い位置の）要素と呼応するとりたて詞は、否定辞と呼応する「しか」に先行して現れるが、その後には現れえない」ということになる。これを示したのが次の(14)である。

(14) とりたて詞 FP_a が、述部要素 $Pred_a$ と呼応するとき、

a. 許容可能な語順：

FP_a シカ ... Neg - $Pred_a$

b. 許容不可能な語順：

*シカ FP_a ... Neg - $Pred_a$

この語順制限は、「「しか」の呼応関係と他のとりたて詞の呼応関係とが交差することは許されない」もしくは「「しか」と否定辞との間に（一定の）とりたて詞が介在してはならない」と読み替えることができ、理論的研究では、既にこのような記述的一般化とそれに対する説明が提案されている（cf. Tanaka (1997, 1999), Nishioka (2000)）。

本稿では、この現象の説明に関わるさまざまな理論的問題——例えば、統語的派生のどの段階で、どのような種類の移動に、いかなる原理に関わる制約がかかるのか——には踏み込まず、記述的研究としてとりたて詞の分析をより精密化するために、この問題に関わる現象をさらに観察し、検討していく。

2. 呼応関係の交差

本節では、上で見た「「しか」の呼応関係と他のとりたて詞の呼応関係とが交差することは許されない」という一般化を便宜的に用いて、前節で観察した語順制限についてもう少し詳しく検討する。

前節で「しか」句の後に現れると非文法的になるとした「さえ」「こそ」は、1.4節の仮定が正しければ、いずれも否定辞よりも上位の述部要素（時制辞もしくは接続助詞）と呼応するとりたて詞である。意味解釈上、これらの語は否定文において、否定のスコープに含まれる解釈を持たない。

1.1節で取り上げた「意外」の「さえ」で考えてみる。

(15) 太郎はその事実を親にさえ打ち明けなかった。

この(15)は、「（誰にも言えない内容だったので）最も信頼できる親に打ち明けることもなかった」のように解釈される。つまり、「打ち明けない」ことが「親」にも及んだということが「意外」であるのであり、「さえ」は否定のスコープの外で解釈されている（cf. 茂木 (1999)）。

さて、この(15)の「さえ」は二格名詞句に後接しているが、構造的に見れば、この表面上の位置、すなわち二格名詞句のある動詞句内の位置において解釈されているとは言えない。一般的に仮定されているように、相対的スコープ解釈には二つの量化要素の構造的関係が反映されているとするならば、(15)の解釈は、「さえ」と否定辞との間の構造的関係において、前者が後者よりも構造的に上位にあるということを示している。したがって、「さえ」は、動詞句内ではなく、動詞句のレベルから上に（先の仮定に従えば、さらに否定辞句を越えて時制辞句のレベルまで）繰り上げられた形で解釈を受けていることになる。これが、先の(12)で示した「意外」の「さえ」の呼応である。

ここで問題としている「しか」の語順制限を、この前提に基づいて考えてみる。

否定辞「ない」と共起する「しか」が否定辞と呼応し、かつ、後続するとりたて詞の呼応関係が「しか」の呼応関係と交差を起こさない状況とは、当該のとりたて詞の呼応関係が否定辞句の内部（下位の構造レベル）で完結する場合か、もしくは(14a)のように呼応関係が否定辞句よりも上位の構造レベルで成立する場合である。これらの場合、文は問題なく許容される（この例は次節で扱う）。

逆に、当該のとりたて詞の呼応関係が否定辞句に収まらないものである場合、必然的に(14b)のような交差が起こり、文は許容されなくなる。例えば、「しか」句に「さえ」「こそ」が後続する場合、これらのとりたて詞の呼応関係は必然的に「しか」の呼応関係との交差を起こし、文は不適格なものになる。

この分析の妥当性は、「しか」句ととりたて詞との間に、上のような表面的な語順制限だけでなく、次節で見るスコープ解釈上の制限があることから裏付けることができる。

3. 「しか」句ととりたて詞の解釈制限

ここまで見てきた「さえ」「こそ」とは異なり、「だけ」「まで」は、否定文において二つの解釈を生じる。この二義性は、これらのとりたて詞と否定の相対的スコープ解釈によるものである（cf. 茂木 (1999), 沼田 (2001)）。これらのとりたて詞を含む句が「しか」句と共起した場

合、次のように、先の「さえ」のケースのような、分布上の語順制限は観察されない（以下、スコープ解釈のしやすさを考慮し、便宜上、とりたて詞と格助詞との承接順に差を設けている場合がある）。

- (16) a. 花子は 赤いリンゴしか 太郎だけに 渡さなかつた。
 b. 花子は 太郎にだけ 赤いリンゴしか 渡さなかつた。
- (17) a. 花子は 赤いリンゴしか 太郎にまで 渡さなかつた。
 b. 花子は 太郎にまで 赤いリンゴしか 渡さなかつた。

しかし、「だけ」「まで」の場合、「しか」句との相対的な語順と、可能な相対的スコープ解釈との間に相関があることが指摘できる。言い換えれば、「しか」と共起する「だけ」「まで」には、「さえ」「こそ」のような分布上の語順制限の代わりに、意味解釈上の制限が存在する。

まず、「しか」句—「だけ／まで」句の語順では、「だけ」「まで」が否定のスコープに含まれる解釈（いわゆる命題否定解釈）に限定され、その逆の解釈はできない。具体的に、「だけ」の例から見てみる。

- (16) a. 花子は 赤いリンゴしか 太郎だけに 渡さなかつた。 [再掲]

(16a) は、「太郎一人に渡したものは、赤いリンゴだけだ（他のものは太郎以外の人にも渡した）」のようにパラフレーズできる。「赤いリンゴ」は「太郎だけに渡している」と解釈されるため、「だけ」が否定されるとするのは奇妙に思われるかもしれないが、この文では「赤いリンゴ以外のもの」について「太郎だけに渡す、ということをしなかつた」ということが述べられており、「だけ」が否定の作用を受けている。

なお、この (16a) の語順では、「だけ」が単独で現れた場合に潜在的に持つ述語否定解釈、すなわち、「だけ」が否定のスコープに含まれない、「太郎ただ一人に、赤いリンゴしか渡さなかつた（太郎は他のものを持っていない）」のような解釈はできないことに注意したい。

「まで」の場合も同様である。

- (17) a. 花子は 赤いリンゴしか 太郎にまで 渡さなかつた。 [再掲]

(17a) は、「(あまり親しくない) 太郎にまで渡したも

のは、赤いリンゴだけだ（他のものは太郎に渡していない）」という解釈は得られるが、「まで」が否定のスコープに含まれない「(ごく親しい) 太郎に対してまで、赤いリンゴしか渡さなかつた」という解釈はない。

一方、(16b) (17b) のような「だけ／まで」句—「しか」句の語順では、まさに (16a) (17a) で得られないとした解釈が得られる。「だけ」の例から見てみる。

- (16) b. 花子は 太郎にだけ 赤いリンゴしか 渡さなかつた。 [再掲]

(16b) は、「花子は、太郎ただ一人に、リンゴのみを渡した（太郎だけは、赤いリンゴ以外何ももらっていない）」のような解釈になる。このとき、語順上「しか」に先行する「だけ」は、否定のスコープには含まれない。「まで」の場合も同様である。

- (17) b. 花子は 太郎にまで 赤いリンゴしか 渡さなかつた。 [再掲]

(17b) は、「(親しい) 太郎に対してまで、赤いリンゴしか渡さなかつた」という解釈になり、「まで」を「さえ」に変えた次の文とほぼ同義になる。

- (18) 花子は 太郎にさえ 赤いリンゴしか 渡さなかつた。

否定のスコープに含まれることのない「さえ」への言い換えからも示唆されるように、「しか」に先行する (17b) の「まで」は、否定の作用を受けていない。

ここまで見てきた現象から、「しか」句と「だけ／まで」句の相対的な語順と、「だけ」「まで」の意味解釈（否定との相対的スコープ解釈）との間の関係は、次のようにまとめられる。

- (19) a. 「しか」句に先行する「だけ」「まで」は、否定の作用を受けない。
 b. 「しか」句に後続する「だけ」「まで」は、否定の作用を受ける。

「だけ」「まで」のように、否定文において潜在的に文解釈の二義性を持つとりたて詞は、「しか」句に後続する場合、否定のスコープに含まれる解釈のみが可能になる。この (19b) の事実は、先の「さえ」「こそ」の場合と同様に分析できる。

すなわち、「だけ」「まで」は、否定辞句よりも下位にある述部要素（動詞のような述語）との呼応という選択肢を持っており (cf. 佐野 (2001)), 否定文における二

義性もここから生じている。したがって、必ず「しか」の呼応関係との交差が起こる「さえ」「こそ」のように文自体が許容不可能になることはないものの、「だけ」「まで」は、述語との呼応関係から得られる解釈、すなわち否定のスコープに含まれる解釈のみを生じるということになる。

4. 「しか」句ととりたて詞句の語順と否定

ここまで、「しか」句との相対的な語順によって「さえ」「こそ」に生じる分布の制限（第1節）と、「だけ」「まで」に生じる解釈の制限（第3節）を見てきた。これらの観察結果をまとめると、次のようになる。

(20) とりたて詞 FP_α が、述部要素 $Pred_\alpha$ と呼応するとき、

a. 許容可能な語順：

FP_α シカ ... Neg - $Pred_\alpha$

b. 許容不可能な語順：

*シカ FP_α ... Neg - $Pred_\alpha$

〔14を再掲〕

(21) とりたて詞 FP_β が、述部要素 $Pred_\beta$ もしくは $Pred_\gamma$ と呼応するとき、

a. 許容可能な語順（解釈は $FP_\beta > Neg$ のみ）：

FP_β シカ ... Neg - $Pred_\beta$

b. 許容可能な語順（解釈は $FP_\beta < Neg$ のみ）：

シカ FP_β ... $Pred_\beta$ - Neg

(20)の FP_α には、「さえ」「こそ」のタイプのとりたて詞（否定のスコープに含まれる解釈を持たず、否定辞（Neg）よりも上位の述部要素と呼応するもの）が、(21)の FP_β には「だけ」「まで」のタイプのとりたて詞（否定のスコープに含まれる解釈を持ち、否定辞より下位の述部要素と呼応しうるもの）が該当する。

これらの両タイプのとりたて詞と否定のスコープとの関係は、次のように一般化できる。

(22) a. 「しか」句に先行するとりたて詞は、否定の作用を受けない。

b. 「しか」句に後続するとりたて詞は、否定の作用を受ける。

このように「しか」がいわば境界となり、その前後のとりたて詞のスコープ解釈が異なるという事実は、「しか」と共起する「ない」は実質的な否定辞としての機能を持っており、かつ、このとき「しか」は否定のスコープの先端をマークする（片岡（2002））ということを示

している。

なお、「しか」の代わりに「さえ」で考えた場合、次の(23)のように、後続する「だけ」のスコープ解釈は二義的になり、(21b)の「しか」の場合のような解釈の制限はないことが分かる。

(23) 花子は 赤いリンゴさえ 太郎だけに 渡さなかった。

a. 「花子から赤いリンゴを渡されていないのは、太郎だけだ」 (ダケ > Neg)

b. 「花子から赤いリンゴを渡されたのは、太郎一人ではない」 (Neg > ダケ)

ここから、「しか」は、相対的な語順関係によって否定のスコープ解釈が変化する「境界」となる固有の特徴を持っていることが分かる。また、このような「しか」の境界性から、「しか」が同一の節内に複数表れない理由も説明することができる。

なお、「しか」を含む多重とりたて詞文は、上のような一般化に抵触しない場合に可能となる。この限りにおいて、次のように「しか」を含めてとりたて詞が同一の節内に三つ現れても問題はない。

(24) a. 太郎さえ 赤いリンゴしか 花子にまで渡さなかった。

b. 来年こそ 短い期間しか やりたいことだけを やれないはずだ。

5. さらなる一般化の問題

上で示した(20)から(22)の一般化は、「しか」句ととりたて詞句との間に見られる現象から導かれるものであった。しかし、「しか」はとりたて詞の体系だけでなく、NPIの体系の中にも位置付けられる。また、とりたて詞はスコープを内包した量化詞（quantifier）の一種であり、いわゆる数量詞との共通性を考えることもできる。ここから、上の一般化は、次の二つの方向に拡張できる可能性がある。

(25) 「しか」句ととりたて詞句の語順・解釈に関する一般化から、

a. NPIととりたて詞句の語順・解釈に関する一般化へ

b. 「しか」句と数量詞句の語順・解釈に関する一般化へ

以下では、このうち特に(25b)については片岡(2002)の議論に触れながら、これらの視点の展望について述べる。

5. 1 とりたて詞と NPI

(Neg>マデ/*マデ>Neg)

(25a) は、ここまで見てきた「しか」句ととりたて詞句との語順に関する現象を、「しか」だけでなく、NPI 一般に起こるものと考えられる見方である。このような現象は一部、既に Kato (1985, chap. 8) で論じられているが、実際この見方は正しいと思われる。

ここでは NPI の例として、「誰も」「何も」のような「不定詞+モ」の形をとる NPI (「wh-モ」)、「めったに」「必ずしも」のような否定辞を要求する陳述副詞、「一度も」「一人も」のような「最小数量 1 + 助数詞+モ」の形をとる NPI (「1 X-モ」)、「ろくな」「めったな」のような連体詞の例を見ることにする。

まず、「意外」の「さえ」句—NPI の語順では問題がない。

- (26) a. 水さえ 誰も 飲まなかった。
 b. 太郎さえ めったに 来なかった。
 c. 水さえ 一度も 飲まなかった。
 d. 太郎さえ ろくな成績を取れない。

しかし、これを NPI—「さえ」句という語順に逆転させると、「しか」句—「さえ」句の場合 (1.1 節) と同様、一律に許容度が低くなる。

- (27) a. ?誰も 水さえ 飲まなかった。
 b. *めったに 太郎さえ 来なかった。
 c. ??一度も 水さえ 飲まなかった。
 d. *ろくな成績を 太郎さえ 取れない。

そもそも、これらの NPI は、「しか」とは非常に共起しにくい、共起しない。

- (28) a. *誰も 水しか 飲まなかった。
 b. *めったに 太郎しか 来なかった。
 c. *一度も 水しか 飲まない。
 d. ??太郎しか ろくな成績を取れない。

これらの NPI が「しか」と同じ構造的な位置を占めていると仮定すると、上の (27) の現象は、否定辞句における NPI の認可関係と「さえ」の呼応関係との間に交差が起こることにより生じたものと考えられる。このことは、「しか」の場合と同様に、NPI と「まで」句が共起した場合にも「まで」の解釈が一義的に定まることから補強される。

- (29) a. 花子は 太郎にまで 何も 渡さなかった。
 (*Neg>マデ/マデ>Neg)
 b. 花子は 何も 太郎にまで 渡さなかった。

「まで」句が NPI に先行する (29a) は、「(他の人だけでなく)太郎にも、何も渡していない」という解釈に、「まで」句が NPI に後続する (29b) は、「太郎にまで渡したものは、何もない」という解釈になり、それぞれその逆の解釈はできない。

それぞれの NPI の個別的振る舞いに関する考察は必要となるものの、上のような観察から、「しか」句ととりたて詞句との語順に関する諸現象は、NPI ととりたて詞句との相互作用の問題の一環として扱うことができるものであると考えられる。

5. 2 「しか」と数量詞

最後に、(25b) の観点から、「しか」句ととりたて詞句の語順に関する現象と、数量詞との関連性について述べておく。

片岡 (2002) は、「しか」と「20人以上」のような数量詞を含む句が共起する文のスコープ解釈から、次の (30) のような一般化を導いている (ここでは、無標の語順において、語順がより前の要素がより高い位置にあると仮定されている)。

- (30) -しかより構造的に高い位置にある要素は否定の作用域に入れず、-しかより構造的に低い位置にある要素は否定の作用域に入らなければならない。
 (同: 73, (8))

ここでは、この一般化をサポートするいくつかのデータを挙げる。まず、数量詞「いくつか」は否定のスコープに含まれない特徴を持っているが (cf. 加賀 (1997))、「いくつか」を含む句は「しか」句の後に現れない。

- (31) a. 太郎は いくつかの学会で この本しか 売らなかった。
 b. *太郎は この本しか いくつかの学会で 売らなかった。

一方、否定のスコープに含まれる (部分否定可能な) 数量詞「すべて」の場合は、(31) のような語順制限は観察されず、(30) に沿ったスコープ解釈が生じる。

- (32) a. 太郎は すべての学会で この本しか 売らなかった。
 b. 太郎は この本しか すべての学会で 売らなかった。

(32a) は「全学会において、1 種類の本 (この本) の

み販売した」という解釈であるのに対し、(32b)は「(複数ある本の中で)1種類の本(この本)のみを全学会で販売した(他の本は学会ごとに選んで持っていった)」という解釈になる。

さらに、否定文において部分否定解釈のみが許される「尺度表現+は」句は、「しか」句に先行して現れない。

- (33) a. 花子は 気に入ったものしか 毎日は 食べない。
 b. *花子は 毎日は 気に入ったものしか 食べない。

以上のような語順による分布制限と解釈の制限をまとめると、次の(34)ようになる。

- (34) a. 「しか」句に先行する数量詞は、否定の作用を受けない。
 b. 「しか」句に後続する数量詞は、否定の作用を受ける。

一方、先に見た「しか」句ととりたて詞に関する一般化は、次のようなものであった。

- (35) a. 「しか」句に先行するとりたて詞は、否定の作用を受けない。
 b. 「しか」句に後続するとりたて詞は、否定の作用を受ける。〔22)を再掲〕

(34)と(35)は共に、先の片岡(2002)の一般化(30)の一部を成すと考えられる。さらに、5.1節で見たように、(35)の一般化は、「しか」だけでなくNPIに関する記述に読み替えられる可能性がある(実際、ここで見た例の「しか」を「誰も」に替えても判断は変わらない(cf. 加賀(1997: 95-6)))。このことを考え合わせると、本稿で扱った問題はさらに、NPIと量化要素一般の間で論じるべきものへと広がっていくと思われる。

6. 「しか」の語順現象のまとめ

本稿では、「しか」句ととりたて詞の相対的語順に伴う、とりたて詞の分布制限とスコープ解釈の制限について検討した。その結果、これらの制限がそれぞれ共通した問題の一部を成すものであり、いずれも「しか」ととりたて詞の呼応パターンという観点から捉えられることが明らかになった。

また、分析の拡張の一端として、とりたて詞や数量詞、NPIといった日本語の量化要素について、類似した一般化が成立することを見た。今後さらに詳細な検討を要す

るが、本稿で扱ったとりたて詞をとりまくさまざまな問題は、ここでの議論が、従来の品詞論を超えた、量化詞の体系の問題の一部として再編される可能性を示唆していると言える。

付 記

本稿は、第66回関東日本語談話会(2003年1月25日、於:学習院女子大学)における口頭発表「「しか」句ととりたて詞の語順とその制限」に基づいた、茂木(2004)の第5章の一部に加筆・修正を行ったものである。

引用文献

- 加賀信広(1997)「(第Ⅱ部)数量詞と部分否定」廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』研究社出版, 91-178.
 片岡喜代子(2002)「-しかは否定極性項目ではない」『日本言語学会第124回大会予稿集』日本言語学会, 72-77.
 佐野真樹(2001)「日本語のとりたて詞の素性移動分析と Minimality 効果」『日本英語学会第18回大会研究発表論文集(JELS 18)』日本英語学会, 181-190.
 沼田善子(1986)「(第2章)とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, 105-225.
 沼田善子(2000)「(第3章)とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』岩波書店, 151-216.
 沼田善子(2001)「とりたて詞の作用域と否定」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書平成12年度別冊「日本語のとりたて」』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織, 255-264.
 松井(山森)良枝(1996)「自然言語における量化と否定の相互作用 — 「シカ…ナイ」構文を例として —」『人文学報』77, 京都大学人文科学研究所, 141-164.
 茂木俊伸(1999)「とりたて詞「まで」「さえ」について — 否定との関わりから —」『日本語と日本文学』28, 筑波大学国語国文学会, (左) 27-36.
 茂木俊伸(2004)「とりたて詞文の解釈と構造」筑波大学博士(言語学)学位論文。
 Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*. *Sophia Linguistica* 19. Sophia University.
 Nishioka, Nobuaki (2000) *Japanese Negative Polarity Items wh-MO and XP-sika Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature-Checking*.

- In Ken-ichi Takami, Akio Kamio and John Whitman (eds.) *Syntactic and Functional Explorations*. Kurosio Publishers. 159-184.
- Tanaka, Hidekazu (1997) Invisible Movement in *SIKA*-*NAI* and the Linear Crossing Constraint. *Journal of East Asian Linguistics* 6.2. 143-188.
- Tanaka, Hidekazu (1999) *Conditions on Logical Form Derivations and Representations*. Doctoral Dissertation. McGill University.

On the Word Order Restrictions Involving *Shika* in Japanese

Toshinobu MOGI

This paper describes the word order restrictions of *shika* and focus particles (FPs) in negative sentences. These restrictions include restrictions in the distribution of FPs like *sae/koso*, on the one hand, and in the semantic interpretation of the relative scope of FPs like *made/dake* and negation, on the other. Both of these phenomena can be explained by the general syntactic property of agreement in Japanese FPs. This paper also points out the same kinds of phenomena are observable in negative polarity items (NPIs) and numeral quantifiers. This suggests that there is a more generalized restriction among quantifiers in Japanese.